



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 基底時制と表層時制 : スペイン語時制体系の形態・<br>統語・意味論的素描                                              |
| Author(s)    | 出口, 厚実                                                                              |
| Citation     | Estudios Hispánicos. 1978, 4, p. 15-28                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/93575">https://hdl.handle.net/11094/93575</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 基底時制と表層時制

—スペイン語時制体系の形態・統語・意味論的素描—

出 口 厚 実

本稿はスペイン語動詞時制<sup>1)</sup>の形態・統語・意味を統合的にとらえ、その基本的構造と機能を分析し体系化するためのモデルの輪郭を明らかにする。

1) 複雑なスペイン語の動詞屈折への関心から形態面における「時制」を扱った分析は少なくない。Leuschel (1960), Reiff (1963), Wolfe (1967), Stark (1967), Wright (1972), Mel'čuk (1974) etc. のアプローチは時制を音形に結びつける規則を含め、動詞語形をもれなく生成するにはどんな形式的方法が妥当かを追求する。そこでは句構造規則が主役を演じ、場合により若干の変形規則も利用された。以上のような動詞音形を sub-grammar とする研究とは異なり、西語の文構造全般を概観する Stockwell, Bowen and Martin (1965) は(1)に見るような基底部規則で時制を統語的に処理する。これらの規則は4種の Tense-Aspect カテゴリーと

$$\begin{aligned}(1) \quad & VP \rightarrow Aux + verb \\ & Aux \rightarrow ASP (haber + \text{---}do)(estar + \text{---}ndo) \\ & ASP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} Perf \\ Imperf \end{array} \right\} \\ & Imperf \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} Past \\ Non-P \end{array} \right\} (-haber)\end{aligned}$$

haber-do, 及び-haberの組合せによって計10種の時制形(進行形を除く)を作りだす, なかなか簡便な formula である。しかし, 動詞語形が確実に簡潔に導出できるということは, 「時制」の実体を正しく把握することと必ずしも一致しない。例えば(1)に含まれる Aux なる独立の範疇が西語syntaxに存在するか否かは甚だ疑問である。同様に ASP が全動詞形の一部を構成していて, 完結相と不完結相の対立が常に動詞意味における対応物をもつ

Terrell (1970) は意味から形態まで包括的に時制に論及しているが、どちらかと言えば形態的側面が詳しく、その定式化が重視されている。彼は統語素性を縦横に駆使して動詞に含まれる関連の素性を適宜 **segmentalize** して時制接辞や複合時制を生み出すメカニズムを組み立てている。又、**Marking Conventions** を導入し自然度と標記上の簡潔性を関連づけようと試みる。

2) 小論は前節で素描した生成文法によるこれまでの西語時制の取組みのいずれとも異なり、時制はすべて基底において動詞であるとみなす<sup>2)</sup>。時制動詞が文構成のどの位置を占めるべきかについてはいくつかの説がある。



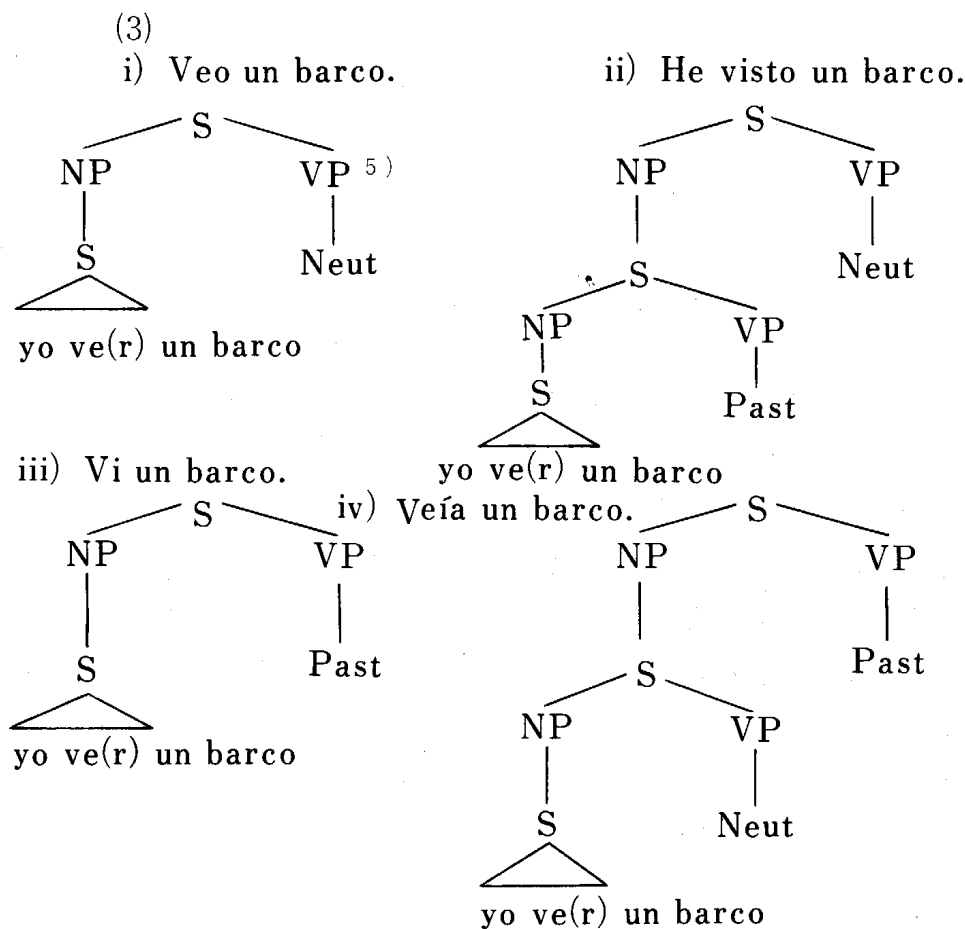
McCawley (1970) などに支持される No-VP Model, VSO 仮説〔a〕か標準的な SVO 語順に立つ VP-Model の NP 補文形式〔b〕か、あるいは VP 補文構造〔c〕か、いずれを選ぶかについては議論の余地があるだろう。しかし、ここではどの枠組を採っても時制体系化の枢要への影響は少ないので、〔b〕を用いて行くことにする。

スペイン語の動詞が示すすべての表層時制形を生成、説明するため次の3つの基底時制動詞(UTV と略す)を仮定する<sup>3)</sup>。

- i. 中立 Neutral (=Neut)
- ii. 過去 Past
- iii. 後発 Subsequent (=Subs)

以上の3単位設定に対する根拠、その意味機能については後半で検討するが、これらはその名称が示すとおり一項三分的に対立する時間指示の区分ではなく、各々が一定の環境で一定の機能を果たす flexible な特性を備えていること、又、上に掲げた順位で一種の階層づけがある点を指適しておく。

3) 例文(3) i) -iv) は各々下に示された UTV 又は UTV を含む構文を埋め込んだ構造を基底<sup>4)</sup>に持つと考えられる。紙面を有効に使うため、文



の樹形図を省略し時制動詞文の埋め込み関係のみに注目して、直説法、接続法の各時制の UTV 構成を図示したのが(4)である。屈折例として動詞 *tomar* の 1 人称単数形を付記する。

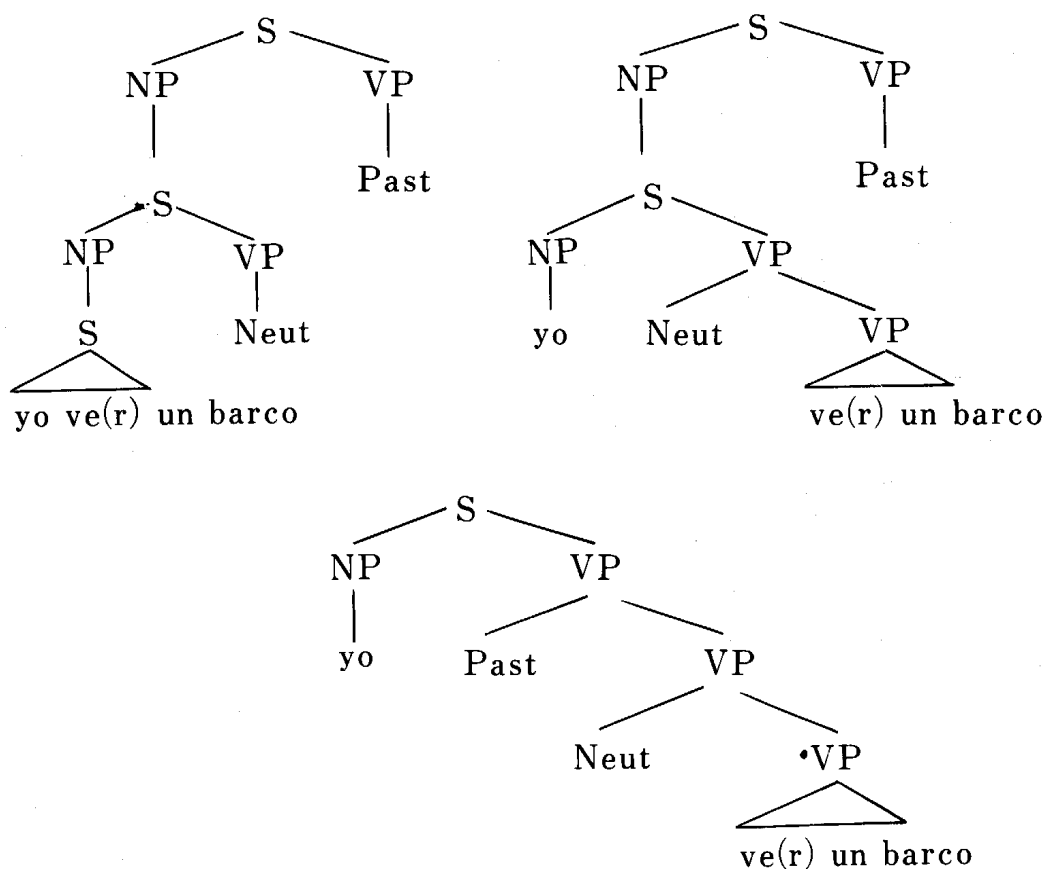
(4)

|         |                  |                             |
|---------|------------------|-----------------------------|
| 直・現在    | tomo             | (Neut)                      |
| 過去      | tomé             | (Past)                      |
| 不完了過去   | tomaba           | (Past (Neut))               |
| 未 来     | tomaré           | (Neut (Subs))               |
| 条 件 未 来 | tomaría          | (Past (Neut (Subs)))        |
| 現 在 完 了 | he tomado        | (Neut (Past))               |
| 過 去 完 了 | había tomado     | (Past (Neut (Past)))        |
| 未 来 完 了 | habré tomado     | (Neut (Subs (Past)))        |
| 条件未来完了  | habría tomado    | (Past (Neut (Subs (Past)))) |
| 接・現在    | tome {           | (Neut)                      |
|         | {                | (Neut (Subs))               |
| 過去      | tomara {         | (Past (Neut))               |
|         | -se {            | (Past (Neut (Subs)))        |
| 現在完了    | haya tomado {    | (Neut (Past))               |
|         | {                | (Neut (Subs (Past)))        |
| 過去完了    | hubiera tomado { | (Past (Neut (Past)))        |
|         | -se {            | (Past (Neut (Subs (Past)))) |

さて、このような時制構造がどのようなメカニズムで表層の動詞形態へ結びつけられるかに関してはここで詳しく検討しない。(3, iv) を例にとれば、概略、次のような VP-Raising が繰り返し適用された、2つの時制動詞 *Past・Neut* が“法”に関する情報を参照しながら動詞右へ接辞化され、-baが<sup>6)</sup>が挿入されよう。

4) 時制動詞が表面構造にどのように実現されるかを調べることにより、3種の時制単位に対する形態音韻上の証拠を示したい。音韻的手段による時制 marking として *Past* 及び *Subs* を表示する強勢位置がある。*Past* を含む時制 i.e. 直・過去・不完了過去・現在完了；接・過去完了形はすべて語幹後の最初の母音に強勢を持つ<sup>7)</sup>。また *Subs* を含むすべての語形も特徴的

(5) Veía un barco.



(6) *Past* :  $\left[ \begin{array}{c} V \\ +\text{stress} \end{array} \right] / \text{stem} \text{ —}$

アクセント位置を有す。即ち未来(完了), 条件未来(完了)は Theme Vowel の後に立つ r の直後の母音に強勢が落ちる。

(7) *Subs* :  $\left[ \begin{array}{c} V \\ +\text{stress} \end{array} \right] / \text{ThV r} \text{ —}$

UTVの中で最も基本的で unmarked な単位である *Neut* が形態的に  $\phi$  実現を持つのは不思議でない。直説法完了過去は “-ba”, 接続法過去は

(8) *Neut* :  $\phi$

“-ra (-se)”をそれぞれ marker とする。時制標識に間接的に影響を与える人称・数語尾の選択に関しても基底時制の構造に係わる。

(9) *Past (Neut)* [indic] : -ba

Past (Neut) [subj] : -ra or -se

西語 person number suffix は 2 sets から成るが, *Neut* を含む時制, i.e. 直・過去を除く全時制 (命令法は一種の非時制形と考える) は  $\phi$ , -s,  $\phi$ , -mos, -is, -n の基本語尾 [PN suffix-A] をとるが<sup>8)</sup>, *Neut* を含まない時制, i.e. 直・過去 *Past* のみは -i, -ste, -o, -mos, -ste-is, -ron [PN suffix-B] で特徴づけられる。

*Subs* は動詞 *haber* と本動詞への -r 接辞として実現され, 上位の時制動詞が *haber* の時制を指定する。

(10) *Subs* : *habe(r)* -r

例えば, 未来では *Neut (Subs)* の *Neut* に対し *haber* が屈折し最終的に /e, as, a ... /<sup>9)</sup> の形を得るが本動詞 (-r 形) の右側へ移動し, 音韻的に一語となる。なお接続法の特徴が動詞に与えられると, *Subs* をすべて削除する規則(11)が存在するので, 形態上, 大幅な中和が生まれる。

(11) *Subs* →  $\phi$  / ]  
subj

時制動詞に直接支配された<sup>10)</sup> *Past* は “後発” に似て *haber* を挿入されるが, 本動詞は -do 形を得る。(10) の場合と同様, *haber* の時制を決定するのはその直近上位の UTV (群) である。例えば, 直・過去完了 (*Past (Neut*

(12) *Past* : *habe(r)* -do / ( (——) ) tns-V

(*Past*))) では (*Past (Neut)*) が (9) により -ba として実現されるので *habe + ba toma -do* から *había tomado* が導かれることになろう。(4) 表に直前過去形を含めなかったのはこの時制が頻用されず, 基本時制体系から脱落しつつある状況を考慮したためであるが, 二次的時制として導出可能である。*hube tomado* の UTV 構成は (13) のように, *Past* に副次的素性 [+immediate] が付加された *Imm-Past* が *Past* に直接支配されているとみなす。ここで *Imm-Past* には (12) と同様な *haber -do* が挿入される。従来, 迂言的時制

(13) *hube tomado (Past (Imm - Past))*

(14) *Imm - Past* : *haber -do / Past (——)*

と呼ばれる動詞語彙項目を利用した表現もこの枠組でうまく説明できる。

(15) *Imm - Past* : *acabar de / Neut (——)*

*Imm - Subs* : *ir a / Neut (——)*

acabar de 及び ir a は(15)に示されるように *Neut* に埋め込まれた *Imm-Past* 及び *Imm-Subs* が動詞 + 前置詞として現われたと考える。acabar, ir の時制を指定する上位動詞は *Imm - Past or Imm - Subs* のすぐ上に来る *Neut* を含む必要があり, この用法で acababa de, iba a は可能だが \*acabé de, \*fui a が生じないことを正しく予測する。本節で考察した各時制単位がどのように音韻・形態・統語的に標識化されるかを表層時制別に一覧表にしたのが(16)である。

(16)

|                                                                                                             |                                                                                                                    |                                                                                                                                    |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>①Present<br/>(Neut)<br/>phon.  <br/>morph. ϕ<br/>synt.</p>                                               | <p>②Present Perfect<br/>(Neut (Past))<br/>phon.  <br/>morph. ϕ<br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>  -do<br/>haber</p> | <p>③Imperfect<br/>(Past (Neut))<br/>phon.  <br/>morph.  <br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>-ba or -ra</p>                            |
| <p>④Preterite<br/>(Past)<br/>phon.  <br/>morph.  <br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>PN suffix -B</p>          | <p>⑤Future<br/>(Neut (Subs))<br/>phon.  <br/>morph. ϕ<br/>synt.  <br/> <br/>-r<br/>haber</p>                       | <p>⑥Pluperfect<br/>(Past (Neut (Past)))<br/>phon.  <br/>morph.  <br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>-ba<br/>or -ra<br/>haber</p>      |
| <p>⑦Future Perfect<br/>(Neut (Subs (Past)))<br/>phon.  <br/>morph. ϕ<br/>synt.  <br/> <br/>-r<br/>haber</p> | <p>⑧Conditional<br/>(Past (Neut (Subs)))<br/>phon.  <br/>morph.  <br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>-ba</p>          | <p>⑨Conditional perfect<br/>(Past (Neut (Subs (Past))))<br/>phon.  <br/>morph.  <br/>synt.  <br/>  [+stress]<br/>-ba<br/>haber</p> |

N.B. すべての *Neut* は PN suffix -A の形態実現と関連するが, 上表から省略する。

5) UTV をとる VP を直接支配する S を時制文とするならば, 3 種の時制文は相互埋め込みが全く自由なわけではない。(4)に見た17種の組合せ以外



は、たとえ意味的に成り立っても西語の時制として独立した具現を持たない。一つの制約は同じ UTV は直下に埋め込まれないという点である。(17)の如き時制構成は西語では排除される。また *Subs* の出現する環境はきび

- (17) …… (*Neut* (*Neut*……  
 …… (*Past* (*Past*……  
 …… (*Subs* (*Subs*……

しく制限されていて、必ず *Neut* に直接支配されていなければならず *Subs* が埋め込むことのできるのは *Past* のみである。さらに一つの時制構成の中で *Neut* は自己を支配することができず、*Past* は二つ以上の *Past* を支配できない。

主文・補文の時制共起関係についても非時制文をはさんで上下の時制文の両立性として一般化できる現象が多い。動詞の意味内容が補文に自由な時制の選択を許す動詞, p.ej. *decir* について言えば、主文の時制形が現在、未来、現在完了、未来完了のとき *que* で導かれる補文の時制に制限がない。即ち、基底時制構造において頂位<sup>11)</sup>の UTV が *Neut* であれば非時制動詞文に埋め込まれた時制文は自由な時制をとれることを示している。一方、主文動詞が *dije*, *decía*, *había dicho*, *habría dicho*, *diría* であると従属節動詞は、通常、現在・未来・現在完了・未来完了であり得ない。この事実は、主文の頂位 UTV が *Past* であれば、従文の頂位 UTV も *Past* でなければならないという時制調和の原則で簡潔にとらえることができる。また非現実仮定文における条件節及び帰結節の頂位 UTV は共に *Past* でなければならない制限がある。

直接話法と間接話法における伝達内容の時制にも興味深い対応が見られる。(18)で直接報告文の時制を、発話時制の頂位 UTV である *Past* に埋め込

(18) Direct Speech ↔ Indirect Speech

- a. Dijo—Voy… : Dijo que iba…  
 (Past) (Neut) (Past (Neut))  
 b. Dijo—Iré… : Dijo que iría…  
 (Past) (Neut (Subs)) (Past (Neut (Subs)))  
 c. Dijo—He ido… : Dijo que había ido…  
 (Past) (Neut (Past)) (Past (Neut (Past)))

d. Dijo—Habré ido… : Dijo que habría ido…

(Past) (Neut(Subs(Past))) (Past(Neut(Subs(Past))))

ませたものが間接話法文の時制となっていることがわかる。ところが、過去、不完了過去、過去完了のように *Neut* を頂位に持たぬ時制が報告内容にある時、間接話法文に現われるのは (c) の場合と同様、過去完了形である。(19) の左側の時に *Past* を上乘せして出来る 3 種はいずれも前述の同一時制の

- (19) Dijo —Fui…(Past) → \*(Past(Past))  
 —Iba…(Past(Neut) → \*(Past(Past(Neut)))  
 —Había ido…(Past(Neut(Past)))  
 → \*(Past(Past(Neut(Past))))

直接自己埋め込み禁制に触れるので、結局これら相互間及び (18c) との対立は中和され (Past(Neut(Past))) = 過去完了形に実現する。

不定詞形成を受けるとき補文時制は通常削除される。しかし底位の<sup>12)</sup>の *Past* は消されないでそのまま残り、表層へ *haber-do* として出現する。文 (20) は主語繰り上げが適用された文 (21) とパラフレーズの関係にある (García

- (20) Parece que María { *salió*  
                                   *ha salido* } hace una hora.

- (21) María parece haber salido hace una hora.

Pinto and Luján 1975 : 50) が、(21) の *haber salido* が (20) の *salió* 及び *ha salido* の両形に対応するのはこのためである。(22) において *ha salido* の

- (22) Parece (Neut) — [ *salió* (Past)  
                                   *ha salido* (Neut(Past))

*Neut* が delete された後、*Past* に *haber-do* が挿入されるよう (12) を修正しなければならない。即ち、VP-Raising 適用後、*Past* を支配する VP が別の VP に直接支配されていれば *haber-do* を得るよう、(12) を (23) に改変

- (23) *Past* : *haber-do* / [V [—X] vp] vp

すればよい。

6) 現代西語においては接続法語形に *Subs* が関与しないことは (11) の存在で明らかである。接続法時制形は *Neut*, *Past* のみで構成される 4 種類で 9 種の直説法と較べ大幅に簡素化されている [Cf, (4)]。そして、直説法で見られるような、*Subs* を含むか含まないかの対立が解消した結果、*Subs* を持たない時制が同時に *Subs* を埋め込んだ構造をも代表する中和の無標項

になっている。例えば *tomare* (Neut(**Subs**)) は単に (Neut) に変わり *tome* で表わされるようになった(24)。条件未来(完了)に当たる接続法形

- (24) *tomare* (Neut(**Subs**)) → *tome* (Neut)  
*hubiere tomado* (Neut(**Subs**(Past)))  
→ *haya tomado* (Neut(Past))

は存在しないが、この意味は同様に *Subs* を消去した UTV 構造の実現で

- (25) “*tomaría*” (Past(Neut(**Subs**))) →  
*tomara* (Past(Neut))  
“*habría tomado*” (Past(Neut(**Subs**(Past)))) →  
*hubiera tomado* (Past(Neut(Past)))

示される(25)。このような *Subs* の不安定な状態は直説法へも波及して、全般的に見れば、3時制動詞体系から *Subs* を除去した2時制動詞体系へ単純化する傾向が認められるようである。si節内では未来(完了)形に代わって現在(完了)形が用いられる外、殊に口語文体ではその他の場合にも

- (26) *tomaré* (Neut(**Subs**)) → *tomo* (Neut)  
*habré tomado* (Neut(**Subs**(Past))) →  
*he tomado* (Neut(Past))

一般に、未来→現在、未来完了→現在完了、条件未来→不完了過去、条件未来完了→過去完了の代替や交替が珍しくない。これは(27)に示されるように *Subs* の機能低下あるいは停止とみなせば、各々の場合、代わりに用い

- (27) *tomaré* (Neut(**Subs**)) → *tomo* (Neut)  
*habré tomado* (Neut(**Subs**(Past))) →  
*he tomado* (Neut(Past))  
*tomaría* (Past(Neut(**Subs**))) →  
*tomaba* (Past(Neut))  
*habría tomado* (Past(Neut(**Subs**(Past))))  
→ *había tomado* (Past(Neut(Past)))

られる時制形が極めて自然に説明されるだけでなく、(24)(25)を含めて1時制動詞が広範に消失する現象として巨視的な把握が可能になる。

7) 前節まで形態音韻一統語両面から3つの時制単位に対する論拠を示したが、最後にこれらの動詞の意味的性格規定を試みる。動詞時制の意味はしばしば誤解されるように、一定の時間空間を一方向的に画定するのではなく、

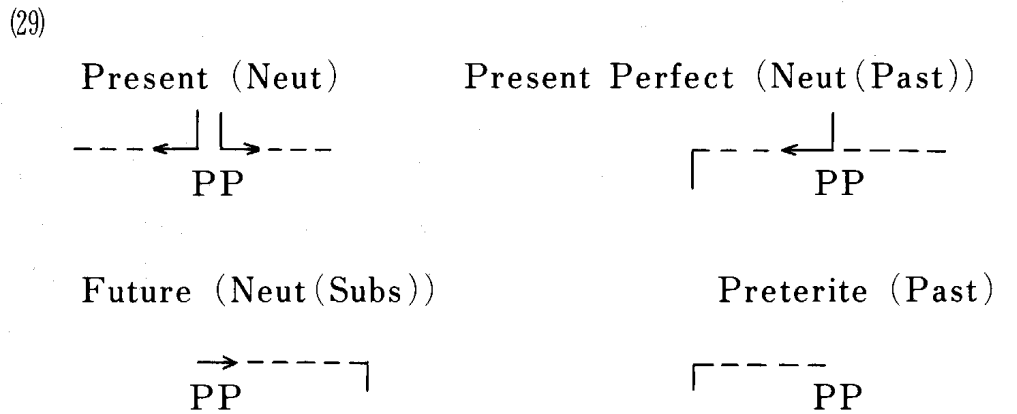
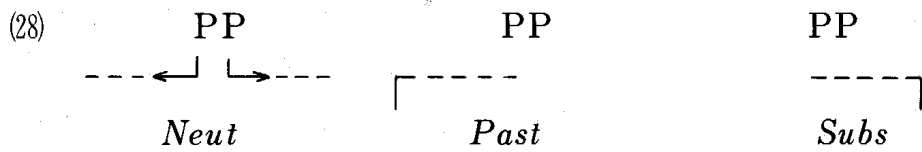
event (事象) を発話の時点と関連させ相対的に位置づけるか、事象の内的時間構成の局面をとらえる。言語時間と時制の関係は名辞と代名詞のそれに喩えられる。前者が無限の名詞句でもって表現せられるのに対し後者の数はどの言語でも比較的小数個に限定されているように、副詞・前置詞句など多様な時間表現に対応する、いわば *pro-time-adverb* として機能するのが一定数の表層の *tense* である。

単独で時制形を構成する UTV は *Neut* (直説法・接続法現在) 及び *Past* (直・過去) のみであるが、これらの時制が迂言形式 (p.ej. UTV + 動詞語彙項目 + その他) で代替され得ず、常に形態的・音韻的 *marker* に直結される事実を反映している。*Neut* は共通の話題時間に言及する最も無標の単位で、話し手聞き手の間に成立するコミュニケーションそのものを含む時間帯を示すのが普通である。*Neut* が単独に時制を担えば現在形であるが、これは無標の文脈では *Point Present*<sup>13)</sup> を中心に後方及び前方への延長部分を指示したり、超時間的な抽象 event と共に用いられる。しかし話題時間の原点を回想時に設定することも可能で、歴史的現在、*narrative present* etc. と呼ばれるのは *Neut* のこの用いられ方を指す。一方、本来 *Subs* に属す未実現の事柄も、話者の文体的配慮から先取された時点基準にして *Neut* で捉えることができる。また *Neut* は本質的に不完結アスペクトを持ち、それは底位にある時、i.e. 現在・不完了過去形で顕著に現われる。*Reference point* が明示され *Past* の直下に埋め込まれている時 (i.e. *Past* (*Neut*), 直・不完了過去<sup>14)</sup>, 接・過去) も *Past* で示される RP における PP を表わすと同時に、*Neut* は *Past* が固有にもつ完結相の効力を停止させる。

*Past* は絶対的時制として、通例 *Neut* から見た *Recalled Point* における完結アスペクトを指示するが、文脈によって *Neut* が時間軸の前後へ移動すれば、それに合わせて連動する。*Past* が *Neut* 又は *Subs* の下に埋め込まれている時、上位動詞の指示時間とそれより先行する時点との回顧的結合により、2 時点に関連づける。一方、*Subs* は常に明示された時制 (上位の時制動詞) から見た前望点 *Anticipated Point* に言及する。この *reference point* が PP であれば未来 (完了) 形になり、RP であれば条件未来 (完了) 形が生じる。

以上の 3 UTV の基本機能とそれぞれの組合せによる時制を図示したの

が(28)(29)である。



Imperfect (Past(Neut))

Pluperfect (Past(Neut(Past)))

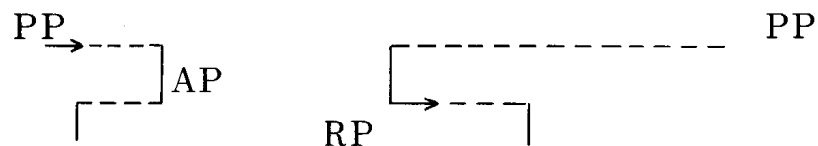


Future perfect

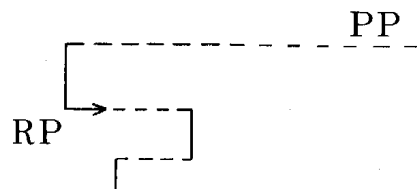
Conditional

(Neut(Subs(Past)))

(Past(Neut(Subs)))



Conditional perfect (Past(Neut(Subs(Past))))



(August 8 th, 1977)

\*この論文は1977年4月23日、関西スペイン語学談話会第21回例会（於大阪外国語大学）で筆者が“Spanish Tense-System: A Morpho-syntactico-semantic View”と題して口頭発表したものの一部である。

註)

- 1) ここで「時制」はアスペクトやその他の対立に関与するカテゴリーも含めた cover-term として用いる。
- 2) この考え方は McCawley (1971) で論じられ英語時制の分析に適用されている。
- 3) 小論では触れないが、進行・習慣・始動その他の「aspect」や可能・義務・推定 etc. の「modal」も又動詞で表わされると考える。
- 4) これらは統語的基底構造である。原 (1976, 1977) の提唱する創出文法では例えば「(直説法) 不完了過去」(1976, 47) や「完了過去」(1977, 29) が意味構造に仮定されているが、筆者の枠組みによれば、これらは意味構造はおろか統語構造にもなく、形態論上のカテゴリーに過ぎない。
- 5) 以下の tree から時制動詞を支配する V 節点を省く。
- 6) 第2・第3活用に対して -ba を -a に変える形態論の規則を設けるか、あるいは最初から -a を直接導入しなければならない。
- 7) 強変化動詞 p.ej. tuve, supo, etc. 及び不規則過去分詞 dicho, hecho 等に例外がある。
- 8) 直説法現在 1 sg は例外的に -o で示される。
- 9) pl 形 -eis は法助動詞として用いられる場合の独立形と相違する。又 (past (Neut)) に対する /ía, ías, ía.../ でも語根 /ab/ が失われる。
- 10) 以下、便宜的に U T V (A) が U T V (B) を直接支配する、あるいは埋め込むと述べるのは (A) を含む時制文の主語補文が (B) を含む時制文であることを意味する。
- 11) 他の時制動詞に直接支配されない U T V を頂位にあると呼ぶ。
- 12) 他の時制動詞を直接支配しない U T V を底位にあると呼ぶ。ある U T V が同時に底位、頂位でありうる。上注参照。
- 13) 以下各 U T V の時間指示機能を見るのに Bull (1968, 17—22) の用語である 3 時方軸, PP (Point Present), RP (Recalled Point), AP (Anticipated Point) を借用する。
- 14) この時制形は aspectual verb 「習慣」を含んだ構造からも生ずる。

REFERENCES

- Bull, William E. (1968): Time, tense and the verb. A study in theoretical and applied linguistics with particular attention to Spanish. Berkeley and Los Angeles.
- García-Pinto, Magdalena and Marta Luján (1975): On subject-raising in Spanish. -William G. Milan et al. (eds.): 1974 Colloquium on Spanish and Portuguese Linguistics., 44—50.
- Hadlich, Roger L. (1971): A transformational grammar of Spanish. Englewood Cliffs, N.J.

- 原 誠 (1976) : スペイン語のいわゆる "se" の諸用法の再検討から何を学ぶか? —東京外国語大学論集26, 35—64
- (1977) : スペイン語文法論試案——橋論叢 vol. 77 No. 3, 261—278
- Leuschel, Donald A. (1960) : Spanish verb morphology. Ph.D. diss.
- McCawley, James D. (1970) : English as a VSO language. -Language 46, 286—299.
- (1971) : Tense and time reference in English. -Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen (eds.): Studies in Linguistic Semantics., 97—113.
- Mel'čuk, I.A. (1974) : A model of Spanish conjugation. -V. JU. Rozencveig (ed.) : Essays on Lexical Semantics. Vol. I, 43—93.
- Ramos, Manuel A. (1973) : The concept of auxiliary in Spanish: A transformational view. Ph. D. diss.
- Reiff, Donald G. (1963) : A characterization-evaluation system for theories of Spanish verb morphology. Ph. D. diss.
- Stark, Donald S. (1967) : A comparative morphology of four Spanish dialects. Ph.D. diss.
- Stockwell, Robert P., J. Donald Bowen and John W. Martin (1965) : The grammatical structure of English and Spanish. Chicago.
- Terrell, Tracy D. (1970) : The tense-aspect system of the spanish verb: A diachronic study on the generative-transformational model. Ph.D. diss.
- Wolfe, David L (1967) : A generative-transformational analysis of Spanish verb forms Ph.D. diss.
- Wright, James R. (1972) : Spanish verb morphology. Ph.D. diss.